



フリーライター
みずま まゆみ
水間 摩遊美さん

■プロフィール
1946年 熊本県玉名郡岱明町生まれ
1947年 ポリオ罹患 右腕の機能を失う
1969年 尚綱高校を経て福岡大学法学部卒業
1992年 ポリオ生ワクチんとくち基金提唱者としてロシア共和国を訪問
このほか「わたぼうし文学賞」金賞受賞（'82）「国際婦人年論文」福岡県知事賞受賞（'83）「九州電力40周年記念論文」特選受賞（'91）など著作多数

かつて、日本中でポリオ・ウイルスが猛威をふるったとき、母親たちの力で旧ソ連から生ワクチン輸入が実現しました。そしてこの春、当時を映画化した「未来への伝言」の熊本上映に奔走した人が水間摩遊美さん。水間さんはその後、一歩進んで「世界中の子供たちと母親をポリオの恐怖から救えたら」と「ポリオ生ワクチんとくち基金」を設立。一口八円の善意を求めて支援活動や講演に飛び回る、熱い胸の内を語っていただきました。

かつて母親たちが、こんなに力を結集した事実があった

なぜ私が「未来への伝言」の上映に一生懸命になったか——それはちょうど十年前に子育てが一段落したころ、「ポリオを背負った自分のルーツを調べたい」と思ったことに始まるんです。親に聞いた苦労話とは違う、当時の社会的・医学的背景を知りたい、と。その中で出てきたのが昭和二十二年の流行に次ぐ三十六年のポリオ大発生でした。有効な治療や予防がない中で、子供たちがバタバタと倒れていく。業を煮やしたお母さんたちは、当時困難だった日ソの薬品輸入の壁を打ち破る運動を展開したんです。

この事実をみんなに伝えたい。でも個人的にはやはり限度がある。そんなことを考えているうち、今年になってこの映画の完成を知り、早速、熊本での自主上映へ向けて準備に取りかかりました。

その矢先です。モスクワのポリオ研究所が「経済危機で運営困難」というニュースが飛び込んできたのは、今度さらされる——そう思ったときから上映と並んで「ポリオ生ワクチんとくち基金」を始めたんです。

ウチは大丈夫。なのに外国ではまだポリオの恐怖の中に子供たちがいる

最初はね、企業でも何でも、とにかくお金があるところから取ればいい、ってなもんですよ（笑）。ところが上映会や講演会で当時の話や基金の

ことを話すと、反応がすごい。若いお母さん、当時を知る年配の方、医学部を目指す予備校生。みんな涙を流して聞いてくれる。

ふだんこんな運動に関心のなさそうな男の人でもテレながら寄付をする。きっかけさえあれば動いてくれるんです。「そうよ、この八円で生ワク一人分の国際貢献よ」と言うと、まんざらでもなさそうに「そうか、国際貢献か」って。人間てこんなに優しいんだ、ちょっと突けば優しさが出てくるんだ、ってつくづく思いました。

今回、ロシア共和国を訪問して、旧ソ連からポリオ生ワクチンの供与を受けていた東欧諸国や第三世界の国々も困っていると分かりました。「ウチの子は大丈夫なのに、あっちの子供たちは危ないなんて……どうして?」。全てはこの母親の感覚が基本なんです。

誰かが困っているときに、すぐ手を差し伸べられるかどうか——
本当の優しさと豊かさって、
そういうことだと思おう

そして、できることなら二十一世紀までに世界中からポリオ根絶の声が聞けたら……。それが神様からポリオという特別なプラスアルファをもらった私が、すべきことなんじゃないかなと、いま思っているんです。

「ポリオ・生ワクチんとくち基金」
●お問い合わせは
連絡事務局 ☎096(346)1575



昭和36年当時のポリオ研究所を訪ねて。下の写真は生ワクチンを受けた当時の日本の母子たち。



一口八円の善意が世界中の子供をポリオから救う

